

営農ウィークリーNEWS

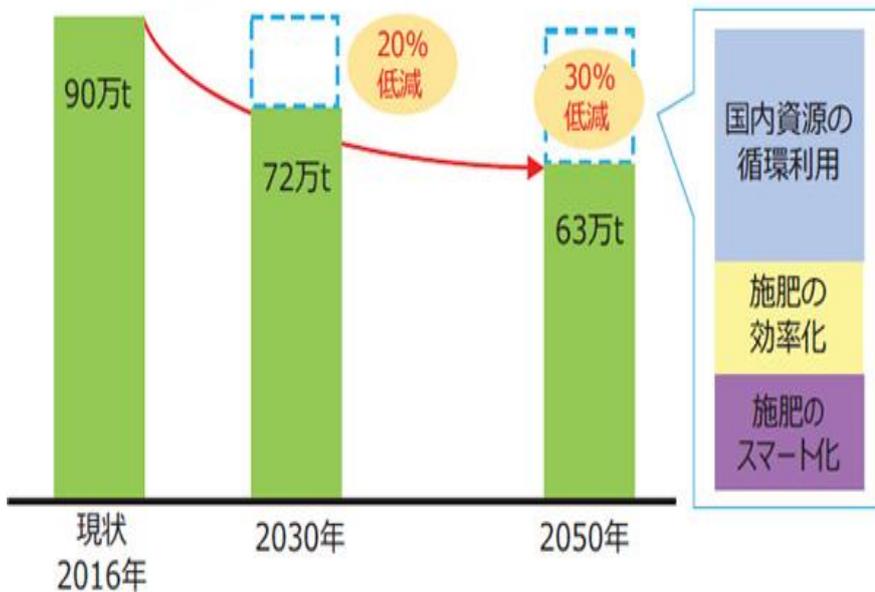
みどりの食料システム戦略で

～有機質資材 JA活緑がますます注目！～

昨年策定された「みどりの食料システム戦略」は、30年後を見越した農林水産業の国の方針です。世界的に重要視されている地球環境や生物多様性などの中で、農林水産業についての課題を明確にしたものです。

特に、化学肥料・化学農薬に頼っている農業技術の一部を、持続性のある農業技術へ時間をかけて切り替えていくとしたものです（詳しくは裏面に）。有機物資源を活用していく技術がクローズアップされており、当JAで生産している土づくりと肥料成分を兼ね備えた「JA活緑」のようなリサイクル堆肥が重要な目標課題に掲げられています。ますます注目される「JA活緑」の活用で良品生産をめざしましょう。

化学肥料の使用量（NPK総量・出荷ベース）農水省資料より



成分	(%)
窒素	2.3
リン酸	1.3
カリ	0.6
その他カルシウム等	

剪定枝チップとビールかすなどを混合し醗酵させた「JA活緑」とその成分

—TAC information—

今でしょ 石灰窒素による ジャンボタニシ防除



今できる石灰窒素による、ジャンボタニシの防除方法があります。やり方は、刈り取り後の水田をそのまま3～4cmの湛水状態にし、そこに、10aあたり20～30kgの石灰窒素を散布して、3日間、17℃以上の水温（晴れの日）で保つ方法です。これにより8割以上のジャンボタニシが死滅し、特に、30kg施用では9割以上のタニシが死滅するとされています。

管内では、収穫後は用水が止まるところが多いため地域が限定されますが、できる地域では是非試してみてください。



みどりの食料システム戦略って何？

令和3年5月に農林水産省は「みどりの食料システム戦略」を策定しました。

EUでは2030年までに化学農薬の50%削減や化学肥料20%削減、有機農業面積を25%に拡大するとした「Farm to Fork」戦略(2020年)を、アメリカでは、2050年までに農業の生産・流通・消費の二酸化炭素流出を大幅に削減するとした「農業イノベーションアジェンダ」(2020年)を策定し実行に移しています。これらは、従来の化学肥料と化学農薬に頼ってきた農業によって地球環境への負荷の増大が明らかになってきたこと、世界的なSDGsへの対応重視などの背景があります。

日本も、世界の流れに遅れを取らないようにとのことから、昨年策定されました。当初、夢物語という意見もありましたが、昨年来の化学肥料原料の輸入調達の困難性から、この戦略が現実味を帯びてきています。

かかげられている目標は2050年までに

- 1 農林水産業のゼロエミッション(排出するCO₂と吸収するCO₂の量を同じにするカーボンニュートラル)
- 2 オーガニック市場を拡大しつつ、水稻を中心に有機栽培面積を25%(100万ha)に拡大。2020年は0.3%(JAS有機12,027ha)。
- 3 天敵や低リスク農薬への転換により、ネオニコチノイド系を含む化学農薬の50%削減。
- 4 化学肥料の使用量の30%削減。
- 5 エリートツリー(品質よく生産性高い)等を林業用苗木の9割以上に拡大
- 6 ニホンウナギ、クロマグロの養殖で人工種苗比率100%を実現

2030年までに

- 7 食品製造業の労働生産性を最低3割以上向上
- 8 食品企業における持続可能性に配慮した輸入原材料調達の実現を目指す

これらは革新的な技術・生産体系を順次開発することで達成する、また、これらを実施する生産者に事業を集中していく、としています。

戦略の中で掲げられている有機質資源に関する「具体的な取組」

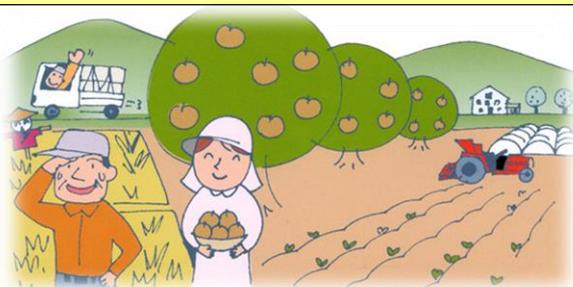
○堆肥の高品質化、ペレット化、堆肥を用いた新たな肥料の生産、広域流通の推進による循環利用システムの構築

○食品残差・廃棄物、汚泥、端材を肥料化・資料化・燃料化するリサイクル技術の開発

⇒ **「JA活緑」はまさにこの項目の目標技術**

○堆肥等の有機資源を活用した施肥体系の確立と現場実証や取組の拡大

○堆肥・緑肥等の有機物の施用による土づくりの推進



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

